地理学報告　第 123 号　63 ～ 68　2021

重要伝統的建造物群保存地区の観光化とまちづくり
―大阪府富田林市の「富田林寺内町」を事例にして―

松村　隼多[1]・大杉　秋乃[1]・小山　英一[1]・阿部　亮吾[2]
([1] 愛知教育大学・学，[2] 愛知教育大学)

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　富田林寺内町の歴史とまちづくり
Ⅲ　観光化への認識とその差異
Ⅳ　おわりに

キーワード：重要伝統的建造物群保存地区，観光化，まちづくり，富田林寺内町，大阪府

Ⅰ　はじめに

1．研究の背景と目的

1975 年の文化財保護法改正により，「伝統的建造物群保存地区（以下，伝建地区）」の制度が発足し，伝統的な町並みの積極的な保存が図られるようになった[1)]。さらにそうした伝建地区のうち，市町村からの申し出を受けて，国が特に価値が高い判断したものは「重要伝統的建造物群保存地区（以下, 重伝建地区）」[2)]に選定される。2021 年 8 月現在，104 市町村 126 地区が重伝建地区となっている。

重伝建地区に選定されると，地区内建造物の修理や保存に補助金が出たり，所有者に対する税金の優遇措置がある一方，建造物の現状変更には許可が必要になる場合もある。また，観光客が増加することで騒音やゴミ問題，渋滞やプライバシーの侵害といった「観光公害」が発生することもあり，地域住民の「生活と観光のバランス」をとる「観光マネジメント」の視点が必要になってくる（張・森田 2020)。たとえば大藤（2018）は，広島県呉市豊町御手洗地区の重伝建地区を事例に，地域住民のまちづくり活動が地域を活性化しながらも，観光と生活の衝突を避け節度ある観光化を志向したことを報告した。

そこで本研究では，大阪府内唯一の重伝建地区である「富田林寺内町」（富田林市）[3)]を取り上げ，重伝建地区の観光化に対する認識の差異を居住地属性の違いに着目して明らかにする。富田林寺内町も，これまで無節操な観光化より地域住民の生活環境を重視するまちづくりが行われてきた（井坂・山城 2009)。であるとすれば，重伝建地区選定以降の観光化のさらなる推進をめぐっては，地域住民と観光客のあいだで認識の齟齬が生じている可能性がある。本研究の注目するところである。

2．対象地域の概観

大阪府富田林市（図 1）は大阪市都心部から約 20km 南東にある，人口 109,650 人（2021 年 3 月末)，面積 39.72km^2 の地方都市である[4)]。人口は 2002 年をピークに減少傾向が続いている。府内唯一の重伝建地区を擁し，地区全体で歴史的な町並みが保全されている（図 2)。特に 1997 年 10 月 31 日の重伝建地区選定以降，町並みの修景や「じないまち交流館」（図 3）など来訪者向け施設も充実してきた。後述するように，現在は地域住民を中心とした積極的なまちづくり活動が展開されている。

Ⅱ　富田林寺内町の歴史とまちづくり

本研究では，富田林寺内町においてまちづくりを進める「富田林寺内町をまもり・そだてる会」（以下，そだてる会)，空き家の所有者と入居希望者のマッチングを行う「有限責任事業組合富田林町家利活用促進機構」（以下，LLP まちかつ)，そして「富田林市役所」

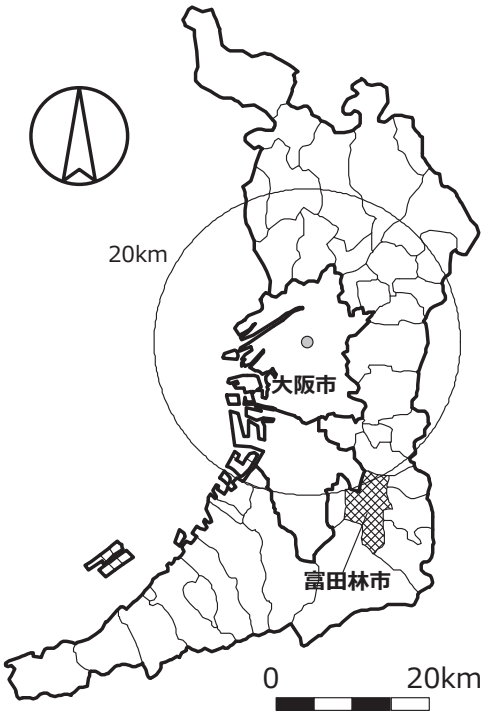

図 1　大阪府富田林市の位置

といったまちづくりのキーパーソンに対して，富田林寺内町の歴史やまちづくりに関する聞き取り調査を行った（いずれも 2021 年 3 月 17 ～ 18 日実施）。Ⅱの内容はこれら聞き取り調査にもとづいている。

1．富田林寺内町の歴史

室町時代末期の永禄年間（1559 年頃），京都興正寺第 16 世の証秀上人が建立した興正寺掛所（現在の興正寺別院）を中心とする宗教自治都市として，富田林寺内町は誕生したとされている。江戸時代には，幕藩体制のもとで次第に宗教色が薄れ，周辺地域の農作物の集散地や商業活動による在郷町として発展していった。富田林寺内町では川を使用した交流が盛んであり，水資源にも恵まれていたこともあって酒造業が盛んに行われた。ところが，明治時代に入ると鉄道や道路が整備され，寺内町から銀行や商店が駅前や大通りに移転していった。

近年は，中心市街地の衰退や地域固有の産業の斜陽化などによる人口減少・少子高齢化が止まらず，町家等の空き家の増加が大きな問題となっている。そうした流れのなかで, 1997 年の重伝建地区選定が行われた。

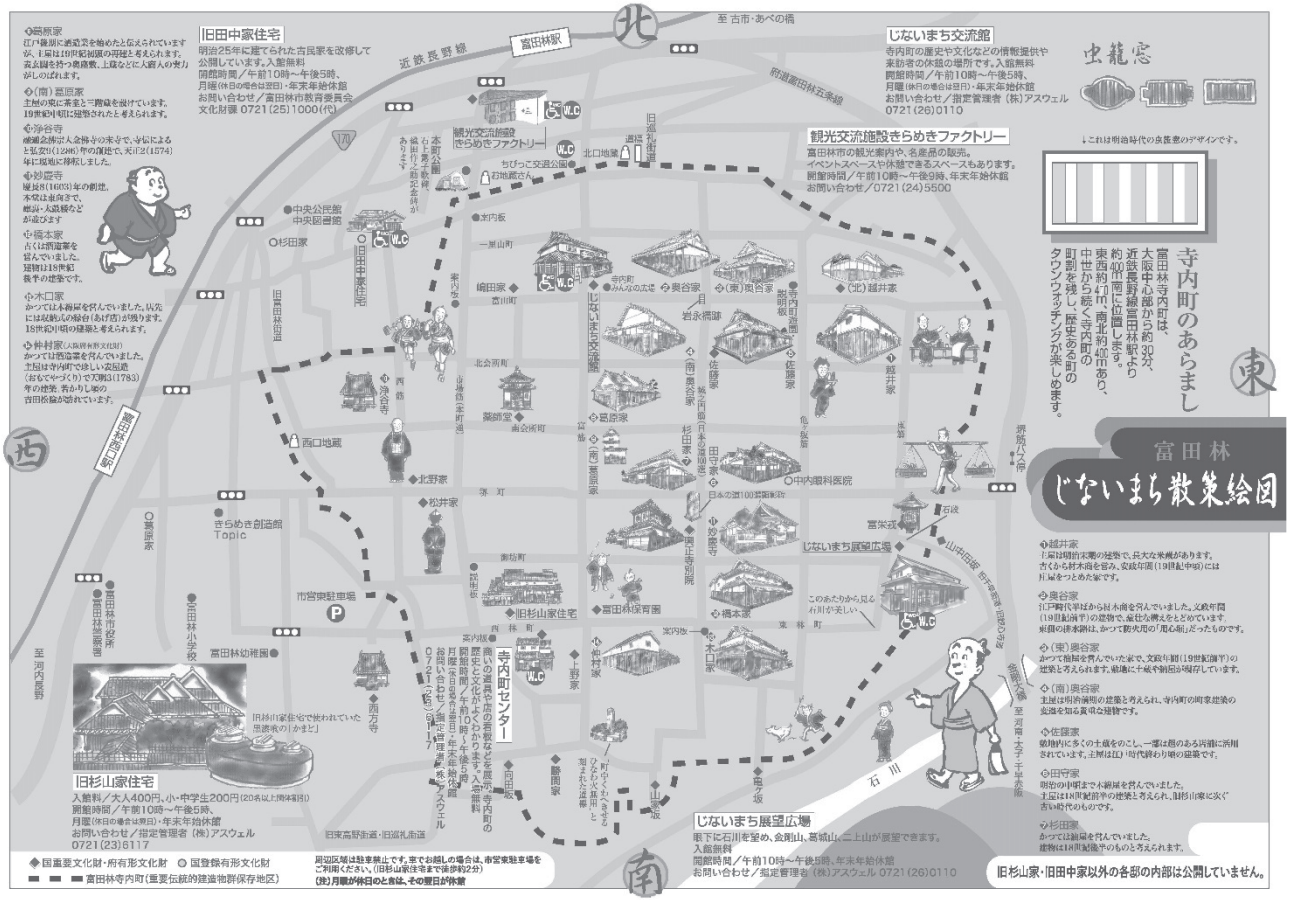

図 2　富田林寺内町の概観

（富田林市ホームページより転載）

図 3　じないまち交流館
（2021 年 2 月 14 日，阿部亮吾氏撮影）
2006 年 4 月に開館

2．重要伝統的建造物群保存地区の選定とその影響

重伝建地区に選定されて以降，修景や環境整備事業が 156 件（2018 年 3 月時点）行われてきた。代表的なものとしては，富阪戎神社の本殿・拝殿の修理や仲林家倉庫の修景などがある。また，寺内町の建物間は距離が狭く，耐久性の低下もみられるために，じないまち展望台広場の整備や道路の美装化など，防災施設整備も多く行われている。

2013 年 8 月に，寺内町内に建設予定であった都市計画道路が見直しとなったことを受けて，2016 ～ 17 年度には重伝建地区の範囲が西に拡張された。それに合わせて，特定物件の対象が昭和戦前期までに建てられた建造物から，昭和 30 年代のものにまで拡大され，戦後の建造物も評価対象になった。こうした見直し調査の結果，それまで 180 棟であった伝統的建造物が，220 棟にまで増加した。

つづいて，そだてる会と LPP まちかつに焦点を当て，富田林寺内町のまちづくりの変遷を整理しておく。

3．富田林寺内町のまちづくり

(1) 富田林寺内町をまもり・そだてる会

富田林寺内町では，京都府立大学の建築史家・林野全孝氏が寺内町を調査したことをきっかけにして，1973 年に地域住民が主体の「寺内町をまもる会」が発足し，町並み保存の動きが始まった。当該組織が高齢化により解消してしまった後，「地元に残る優れた歴史的町並み・文化遺産を後世まで保存・継承したい」との思いから，富田林市役所と連携を図りつつ，1994 年 7 月に「富田林寺内町をまもり・そだてる会」が発足することになった。

そだてる会は，歴史的町並み保存と居住環境の整備をテーマにした会合や『広報誌』（年 3 回）の発行，全国各地の市町村や町並み保存団体との相互交流を図っている。こうした活動により，町家や街路など町並みが美化され，地元住民の交流や地域活性化に貢献している。そだてる会は，今後富田林寺内町の歴史を知ってもらうために，広報誌の記事内容の工夫を目指している。なお，メンバーの高齢化が目下の課題であるという。

(2) 有限責任事業組合富田林町家利活用促進機構

町家等が空き家にならず利用されるには，中核となる産業の存在が必要である。そう考えた地域住民は，2009 年，現代表の佐藤耕平氏を中心に有志による空き家活用支援組織を立ち上げた。それが「有限責任事業組合富田林町家利活用促進機構」（LPP まちかつ）である。LPP まちかつは，ものづくりやアートの工房などを中心とした空き家活用支援活動を行っている（上岡 2015）。寺内町を含めた周辺地域が住宅地であり，地域住民がいわゆる「観光化」を望んでいないことや，2001 年にオープンした空き家活用第一号の陶芸工房の雰囲気がのちの方向性に与えた影響が大きいという。

LLP まちかつは行政に頼らないまちづくり組織であり，聞き取り調査によれば地域住民 3 名，地区内出店者 3 名，外部関係者 1 名の計 7 名で運営されている。組織設立以降，富田林寺内町を中心に約 40 件の空き家マッチングに携わってきた。ただし，ボランティアをベースにしたまちづくり組織であるため，富田林寺内町の町並みに適さない場合はマッチングを断ることもあるという。つまり，LLP まちかつは町並み保存の「防波堤」になっているともいえよう。

聞き取り調査では，大型の空き家活用が今後の展望であるとの知見を得た。現在寺内町で開業している店舗は，週末のみの営業であるなど小規模なものが多い。また，家族を養うほどの経済効果が期待できず，開業者の大半は女性である。そこで LLP まちかつは，大型空き家の活用を目指しているのである。こうした動きは，2020 年中には本格的に進むはずであったが，コロナウィルス感染症の拡大により計画は停滞中である。

一方，富田林市役所は寺内町を重要な観光資源ととらえているため，LLP まちかつの活動を支援し，寺内町の地域住民以外にも寺内町を知ってもらいたいと考えている。

Ⅲ　観光化への認識とその差異

本研究では，以上のような経緯を経て形成されてきた富田林寺内町の観光化に対する認識を分析するため，寺内町地区周辺や近鉄長野線「富田林駅」や「富田林西口駅」前で街頭アンケート調査を実施した（2021年3月17～18日）。

1．回答者の基本属性

得られた回答者151人の性別をみると男性40人（26.5%），女性111人（73.5%）とかなりの偏りが出た（表1）。これは調査日が平日の昼間であったことが影響している。そのため，本研究の分析には多分に女性の意見が反映されているものと読むべきであろう。年齢層では，女性は比較的まんべんなく回答を得たが，男性はやはり60代以下が少なくなった。

次に，居住地は（重伝建地区外の）「富田林市民」が70人（46.4%）と最多で，重伝建地区内の居住者は28人（18.5%）にとどまった。調査日が平日で，飲食店や雑貨屋など観光客向け店舗の多くが休みであったため，府外からの観光客は少なかった。本研究では，居住地（すなわち重伝建地区からの距離）の違いが観光化に対する認識の差異を生むとの仮説のものと，「重伝建地区」居住者（28人），「（重伝建地区以外の）富田林市」（70人），「それ以外」（53人）の3つの居住地グループに着目して分析を行った。

表1　回答者の年齢層と居住地

単位（人）

性別	年齢層		居住地			
			大阪府内			大阪府外
			富田林市			
			重伝建地区			
男性（40人）	10代	9	1	2	5	1
	20代	3		2	1	
	30代	2		2		
	40代	4	1	2	1	
	50代	3			3	
	60代	5	2	2	1	
	70代以上	14	4	7	3	
女性（111人）	10代	18	3	11	3	1
	20代	14	1	6	6	1
	30代	9	2	4	2	1
	40代	11	1	5	5	
	50代	24	4	10	10	
	60代	13	3	7	2	1
	70代以上	22	6	10	5	1
計			28	70	47	6

（アンケート調査より作成）

2．イベントへの参加経験

まず，富田林寺内町で開催される「イベントへの参加経験」を複数回答可で尋ねた（表2）。その結果，全体的には「じないまち四季物語」（48人，31.8%）への参加度が最も高くなった。これは，富田林寺内町の四季折々の町並みを楽しめるイベントであり，春夏秋冬に合わせて年4回開催されているものである。次が「じないまち散歩」（26人，17.2%）となるが，参加度はだいぶ下がり，他イベントは1割程度であることから，「じないまち四季物語」が最も観光訴求力の高いイベントであると判断できる。

これを居住地グループ別にみると，重伝建地区に近づくほどイベント参加度が高くなり，特に「町家ツアー」のような寺内町内を学べるイベントには，伝建地区内の人しか参加していない様子がうかがえた。

3．空き家活用に対する認知度

次に，重伝建地区内の空き家活用（宿，カフェ，工房，書店，レストラン）の現状に対する認知度を複数回答可で尋ねた（表3）。その結果，おおむね「カフェ」による活用の認知度が高いが，居住地グループ別にみると，重伝建地区内の回答者は「カフェ」に加えて「工房」や「レストラン」での活用も8割以上が認知している。一方で，寺内町外に出ると富田林市民でさえこうした認知度が半分に下がり，富田林市外では「カフェ」を除けば1～2割程度の認知度にすぎない。

そのため，今後観光化を軸にまちづくりを推進するのであれば，まずは富田林市民に対するイベントや空

表2　イベントへの参加経験

単位（人）

空き家活用イベント／居住地	じないまち四季物語	(%)	じないまち散歩	(%)	町家ツアー	(%)	寺内町シネマプラス	(%)	石上露子生誕祭	(%)	興正寺別院春季・秋季祭	(%)
重伝建地区内（n=28）	19	67.9	8	28.6	13	46.4	13	46.4	6	21.4	10	35.7
富田林市民（n=70）	20	28.6	12	17.1	2	2.9	2	2.9	7	10.0	1	1.4
それ以外（n=53）	9	17.0	6	11.3			5	9.4	3	5.7	3	5.7
計（n=151）	48	31.8	26	17.2	15	9.9	20	13.2	16	10.6	14	9.3

（アンケート調査より作成）

注：複数回答可

き家活用の PR がカギになってくると考えられる。

4. 観光化に対する認識

最後に，「富田林寺内町を今後も観光地化していくべきか」の設問に 5 段階尺度法で評価してもらった（表 4）。その結果，「強くそう思う」と「ややそう思う」を合わせて 74.2%（112 人）が観光化を肯定していることがわかった。重伝建地区内に居住する人でさえ，寺内町のさらなる観光化に賛成している様子が理解される。このことから，地域住民がかつてよりも観光化に寛容になっている可能性が示唆された。また，重伝建地区内よりも富田林市民のほうが観光化にはやや積極的であるが，むしろ一般の観光客のなかで観光化に後ろ向きな意見を有する人（9 人，17.0%）がそれなりにいるというのは想定外であった。たとえば，市外の観光客で「わからない」と回答した人の自由記述を読むと，「住んでいる人がどう思っているかわからない」や「住んでいる人の気持ちと観光客の気持ちは違う」とあり，地域住民に対する一定の配慮がうかがえた。人々の観光リテラシーが向上しているのであろうか。

ただし，「現在のような落ち着きや静かさを残した観光化だったら進めたい」と考えている重伝建地区内の人がいた一方で，「観光化を進めればもっと人が訪れ，寺内町が活性化するだろう」という地区外住民の意見もあり，同じ「観光化」という言葉をめぐって言葉の捉え方やイメージが異なっていることが推察された。すなわち，重伝建地区内の居住者がアンケート調査でさらなる観光化を歓迎しているのは，あくまでも「生活と観光のバランス」が保たれていることが前提になっている可能性はあるだろう。

Ⅳ　おわりに

本研究では，大阪府富田林市の重伝建地区「富田林寺内町」におけるまちづくりの経緯を整理するとともに，居住地属性の違いが観光化に対する認識にいかなる影響を与えるのかを明らかにしようと試みた。それによれば，重伝建地区内の居住者でも富田林寺内町のさらなる観光化にはおおむね賛成を示しており，むしろ観光客のほうが無節操な観光化を心配している様子がみられた。

聞き取り調査によると，そだてる会の発足時，地域住民に対する説明会が何度も行われている。観光化の推進が，寺内町の静寂な居住環境を害するのではないかと地域住民が反対の意を示したからである。本研究のアンケート調査中も，重伝建地区内の住民からは「京都のような大型観光バスが往来する観光地にはなってほしくない」という意見が多数聞かれた。その一方で近年，大学生らが富田林寺内町を訪問するようになり，寺内町には「癒し」という観光資源があるのではないかとの意見が寄せられたという。

本研究では，地域住民も観光化に賛成しているとの結果が得られたものの，重伝建地区内の人々が考える「観光化」とは，いわゆる「観光化」ではなく，居住地としての静穏な日常を担保しつつも「癒し」をともなう「緩やかな観光化」がイメージされているのかもしれない。本研究のアンケート調査のみでは，人々にとっての「観光化」の真に意味するところまでは迫れ

表 3　空き家活用に対する認知度

単位（人）

空き家活用の対象 / 居住地	宿		カフェ		工房		書店		レストラン	
		%		%		%		%		%
重伝建地区内（n=28）	18	64.3	24	85.7	23	82.1	17	60.7	23	82.1
富田林市民（n=70）	24	34.3	50	71.4	28	40.0	15	21.4	29	41.4
それ以外（n=53）	8	15.1	28	52.8	14	26.4	7	13.2	13	24.5
計（n=151）	50	33.1	102	67.5	65	43.0	39	25.8	65	43.0

（アンケート調査より作成）

注：複数回答可

表 4　観光化に対する認識

単位（人）

観光化 / 居住地	強くそう思う		ややそう思う		わからない		あまり思わない		まったく思わない	
		%		%		%		%		%
重伝建地区内（n=28）	12	42.9	10	35.7	3	10.7	3	10.7		
富田林市民（n=70）	28	40.0	29	41.4	9	12.9	3	4.3	1	1.4
それ以外（n=53）	17	32.1	16	30.2	11	20.8	6	11.3	3	5.7
計（n=151）	57	37.7	55	36.4	23	15.2	12	7.9	4	2.6

（アンケート調査より作成）

ておらず，より深い分析のためには質的な調査が望まれる。他日に期したい。

謝　辞

本研究を行うにあたって，ご多忙のなか「富田林寺内町をまもり・そだてる会」や「有限責任事業組合富田林町家利活用促進機構」，富田林市役所文化財課の方々には聞き取り調査にご対応いただいた。また，富田林市の地域住民や観光客の皆様には快くアンケート調査にご協力いただいた。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

注

1）文化庁ホームページの「伝統的建造物群保存地区」（https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/hozonchiku/）（最終閲覧日：2021 年 8 月 27 日）を参照。

2）文化庁文化財第二課伝統的建造物群部門の『伝統的建造物群保存地区制度の実務の手引き』（2021 年 3 月）によれば，重伝建地区の選定基準は①伝統的建造物群が全体として意匠的に優秀なもの，②伝統的建造物群及び地割がよく旧態を保持しているもの，③伝統的建造物群及びその周囲の環境が地域的特色を顕著に示しているもの，のいずれか 1 つに該当することである。

3）富田林市観光協会ホームページの「富田林寺内町」（http://tondabayashi-navi.com/miru/jinaimachi.html）（最終閲覧日：2021 年 8 月 28 日）を参照。

4）富田林市ホームページ（https://www.city.tondabayashi.lg.jp/）（最終閲覧日：2021 年 8 月 27 日）を参照。

文　献

井阪英夫・山吹　満 2009．観光まちづくりレポートー「観光」よりも「生活環境」を重視したまちづくり（富田林寺内町（大阪府富田林市））．センター月報（南部経済センター）2009.8：18-21.

上岡文子 2015．重伝建地区「富田林寺内町」とその周辺での空き家活用の取り組みー民主体のアートと工房のまちづくりー．建築とまちづくり 439：14-19.

大藤文夫 2018．交流する人々（2）呉市御手洗地区における重伝建を考える会の活動を中心に．社会情報学研究 23：15-26.

張　海燕・森田優己 2019．歴史的資源保存地域における観光マネジメントの課題ー白川郷・石見銀山・有松を例としてー．桜花学園大学学芸学部研究紀要 12：17-37.